

「夢の実現」

取締役 常務執行役員 ^{くわ} ^だ 葉 田 守

古い話となるが、1991年に「私の描く21世紀の東ソー」論文の募集があった。私も含め140名以上が応募した。結果は敢闘賞をいただき、数万円分の賞品を頂戴したと記憶している。

入賞作品、佳作は社内報に掲載され、幸い私の駄作は記録に残ることなくほっとしているところだが、勇気をもって読み返してみて、「夢」にどれほど近づいたのかを考えるのも一興であると思った。以下が当時の「夢」の一部である。

- ① 新入社員の教育をAI（当時AIという言葉は使っていない）が行う
- ② エチレンの原料にリサイクルプラスチックが一部使われる
- ③ 副反応をミニマム化する触媒が開発されプラントが組立工場並みにスマート化する
- ④ 温暖化とUV増加に耐える農作物開発で高緯度国が穀倉地帯化する

当社の「夢」としては実現にほど遠い感もあるが、世の中の状況として見ると、①自動車の自動運転や、化学プラントの支援システムなどAIを使った教育、支援ツールはかなり普及しつつある。②プラスチックの海洋汚染問題に注目を浴びる時代となり、リサイクルはこれからが正念場で、リサイクルの開発プラントが運転されている。③これはまだまだか。④温暖化は当社にとっても「今そこにある危機」と言えるまで身近になり、ESG投資で背中を押されSDGsに取り組む企業が急増している。

さて、駄作の予言判定はさておき、研究開発は一般的に20年から30年かけてようやく事業の形になると言われている。四日市事業所の新研究棟完成祝賀会では、乾杯の挨拶で「乾杯の挨拶と研究開発は短ければ短いほど良い」と言った野蛮人がいたが（筆者のこと）、当社の研究開発から事業化への一例を紹介すると下記の通りで、15年程度の年数をかけて黒字化している。

・ハイシリカゼオライト	1979年開発開始	1995年黒字化
・ジルコニア粉末	1980年開発開始	1994年黒字化
・免疫診断装置・試薬	1981年開発開始	1996年黒字化

従って、今から20年後の当社を支える製品は今まさにスタートしたばかりの研究かもしれない。それに熱意をもって取り組み、才能と、運と、多くの人々の協力と感謝で育て、振り返ると「夢」が実現したといえる幸せ者は、今この文書を読んでいるあなたかもしれない。あなたの奮闘努力を期待している。